



2016年2月24日放送

印象に残る症例①

若葉ファミリー 常盤平駅前内科クリニック 院長 原田 智浩

今回は「印象に残る症例」として、冷え症の症例についてお話をさせていただきます。

冷え症といえば、たいてい「手足が冷える」と訴えて来院される患者様が多いと思います。確かに手先や足が冷たくてジンジンする・・・などはよく聞かれる話です。そこで今回は、冷え症としてまず「手足の冷え」をテーマにお話をさせていただきます。

さて、診察の場で冷えを訴える方々の手をみると、青白かったり、しもやけのように青白さの中に赤みを呈していたり、冷汗以外の症状も様々です。ほとんどの方はすでに病院で相談されていますが、なかなか改善せず、漢方の門をたたくこととなります。その理由の一端は、西洋医学では冷えという概念がなく、治療法が見つからないからといえます。そこで私たちはこのような患者さんたちを診たときに、どうアプローチし、治療法を考えれば良いのでしょうか。

症例です。身長 162 cm、体重 42 kg、痩せ型の 46 歳女性です。手足の冷えを主訴に外来においでになりました。先の病院では、トコフェロール酢酸エステルや塗薬が処方されていましたが、それほど良くなっていない様です。

顔は色白、体温は普段から 35.4℃程度の低めなのだそうです。月経周期は 40 日を超え、肩こりや腰の冷えもあります。夕方になると足が浮腫んでくるそうです。

手先の爪も見せていただきましたが、ピンク色ではなく、少し血色が悪そうです。舌に

は、縁にお点とよばれる紫色の斑点が数か所に見られます。また歯痕という歯型もついています。お腹は軟弱で、お臍の脇には軽い圧痛点を感じ取れます。

これらの所見から、どのようなお薬を思い浮かべますでしょうか。この患者様の所見を考えてみますと、ポイントは3つに絞られます。

(1) 爪の色、舌のお点、臍脇の軽い痛みから「お血」が伺えます。

(2) 体温が低いこと、月経周期が遅れていること、腰の冷えもあることから、「寒証(冷え症)」はありそうです。

(3) 舌の歯型、足のむくみの様子からは、「水毒」が感じとれます。

つまりこの患者さんは「お血」「寒証」「水毒」の3つがそろっているようです。

このような方に、私はまず当帰芍薬散は考えます。このお薬の特徴は、四物湯という体表の血めぐりを改善させるお薬が含まれていることです。そしてそれを中心に、沢瀉、朮、茯苓という水をさばく生薬が含まれ、これが浮腫みを解消させます。つまり五苓散(四苓湯)があわさっています。

もしも頭重感、めまい、目の下のはれぼったさなどのお話が聞かれるようでしたら、この当帰芍薬散で様子を見ても良さそうです。この女性も案の定時間をかけながらも、冷え症が改善してきました。

四物湯は特に手足が冷えるなど、体の表面が冷える方にまず考えるべき基本薬です。四物湯は、当帰、川芎、芍薬、地黄で構成されていますが、中心の生薬(君薬)は当帰です。四物湯は単独投与で期待するより、さらに生薬が足されて、応用範囲の広いお薬がたくさん用意されていることに面白みがあります。

たとえば温経湯というお薬です。これは四物湯(当帰、川きゅう、芍薬)に、半夏・麦門冬・人参・阿膠・甘草など、体にうるおいをつける生薬があわさっています。そのため水毒といってもどちらかという乾燥傾向のある方に投与されます。先ほどの当帰芍薬散が、浮腫み傾向のある水毒の方が適当でしたが、それとは対称的です。

もしもこの患者様が、口唇が乾く、口唇がむける、手掌が乾燥する、手がひび割れるというお話をされるようでしたら、こちらを選ぶと良いでしょう。診察ではいろいろとお話を伺うことが大切です。

つまり体表の冷えのお薬にはまず当帰を含んだ四物湯類を中心にすえて考えますが、浮腫みタイプの水毒には当帰芍薬散を、乾燥タイプの水毒には温経湯が良いというお話です。お分かりいただけただけでしょうか。

ちなみに当帰を含むという意味から考え方を広げますと、体表を温めるお薬には、当帰四逆湯、当帰四逆加呉茱萸生姜湯があります。これは四物湯類ではありませんが、当帰が主薬(君薬)になって作用しています。

さて話が変わりますが、黄帝内経(こうていだいけい)という医学書をご存知でしょう

か。中国の最古の医学書として有名です。これはもともと「素問（そもん）」9巻、「鍼経（しんぎょう）」9巻からなっていたとされています。その中から現代に伝わる黄帝内経素問は中国の5世紀、8世紀に編纂されて、11世紀に校定されたものが原型と言われています。

その書には気血の通り道として、経絡の存在が記載されています。経絡には陽気を通す陽経と、陰気を通す陰経があります。陽経は体表上面を、陰経は体表下面を流れます。そして裏に存在する臓腑には、陰経が連絡しています。

手足が冷える、つまり体表が冷えるという現象は、表の陽気が不足したものであり、冷えとしては軽いものです。原因は、風寒暑湿燥火の邪気のうち、寒が災いしたものです。これは現代では、薄着ファッションや、エアコンの不適切利用、季節を無視した飲食などによって、体が冷やされて出来あがります。このような場合、まず四物湯の投与を考えて、細かな治療の方向性により、加減発展方を選ぶことが適切です。

また年齢的に更年期世代に入っている女性もおり、体質としての冷え症だけでなく、お血がからんでいることもあります。本来「血」は温める性質があるものですが、滞ると冷え症の形成に大きく関与してきます。

そのような人体の性質を考慮すると、手足の冷えには、お血の薬である四物湯（当帰）とその発展方を考慮することが良いと思われるのです。